

東区の歴史

年表



大友堀 出典：「温故写真帳」

1866

明治以前からフシコサッポロ（伏籠）川流域などにアイヌ民族が生活

おおともかめ たろう
大友亀太郎がサツホロ村（後の札幌元村）に入り、大友堀（後の創成川）を開削し、御手作場（江戸幕府の直営農場）を造成。

1870

さかた
酒田県（現在の山形県）の移民が庚午一ノ村と庚午二ノ村、かしわ
柏崎県（現在の新潟県）の移民が庚午四ノ村（札幌新村）に移住。

1871

庚午一ノ村が苗穂村、庚午二ノ村が丘珠村と改称。札幌元村と札幌新村が合併し札幌村となる。

1873

ついでに
1871年に対雁村（現在の江別市）に移住した陸前国（現在の宮城県）の移民が雁来村に移住。



タマネギの収穫 出典：「移住者成績調査」

1877

札幌農学校（現在の北海道大学）にウィリアム・ペン・ブルックス博士が着任。周辺農家への栽培指導により、札幌村で本格的なタマネギ栽培が開始。

1902

二級町村制に基づき、札幌村、苗穂村、丘珠村、雁来村が札幌村となる。

1955

札幌村が琴似町、篠路村と共に札幌市と合併。

1972

美香保屋内スケート競技場（現在の美香保体育館）で第11回冬季オリンピック大会のフィギュアスケート競技を実施。

札幌市が政令指定都市となり、東区誕生。東区役所（仮庁舎）供用開始。

1974

丘珠獅子舞が札幌市無形文化財に指定。

1977

現在の東区役所と東区民センターの供用開始。



札幌市・琴似町・札幌村・篠路村
合併記念式典 出典：「札幌村創建百年記念誌」



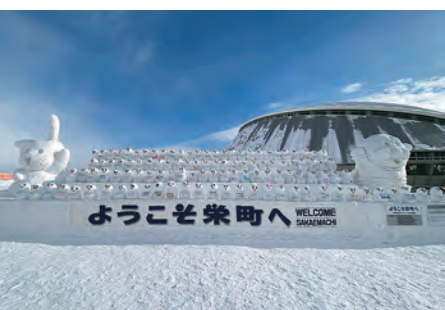
東区役所仮庁舎



地下鉄東豊線開業



タッピー誕生



さっぽろ雪まつり つどいむ会場

1987 札幌村・大友亀太郎関係歴史資料（札幌村郷土記念館で展示）が札幌市有形文化財、大友亀太郎役宅跡（現在の札幌村郷土記念館敷地）が札幌市史跡に指定。

1988 地下鉄東豊線（栄町～豊水すすきの）開通。

1992 東区マスコットキャラクター「タッピー」誕生。

2004 サッポロビール博物館とサッポロビール園開拓使館、北海道鉄道技術館、福山醸造札幌醤油工場、雪印メグミルク 酪農と乳の歴史館、千歳鶴酒ミュージアム（中央区）が札幌苗穂地区の工場・記念館群として北海道遺産に選定。

2006 さとらんどが「さっぽろ雪まつり」の第2会場となる（2008年まで）。

2009 つどいむが「さっぽろ雪まつり」の第2会場となる。

2018 大友亀太郎の事績と大友堀遺構が北海道遺産に選定。

2022 東区区制50周年。

ひがしくすーりー

【大友亀太郎 伏籠川上流地域を開拓】

大友亀太郎は1834（天保5）年、相模国足柄下郡西大友（現在の神奈川県小田原市西大友）の農家に生まれ、幼い頃から、昼は両親と共に働き、夜は勉学にいそしみました。

成長するに連れ、「人の一生はいろいろなことを学び、社会のためにより多く尽くすべきである」との思いから22歳の時に近郷出身の偉人、二宮尊徳の門をたたきました。亀太郎は尊徳晩年の弟子として教えを受けながら、昼は土木事業、夜は勉学に励み、土木技術の習得に努めました。

1858（安政5）年、亀太郎は江戸幕府から、ほかの弟子たちと一緒に蝦夷地（現在の北海道）の開拓を命令されました。この時、幕府の役人として武士に取り立てられ、大友の姓を名乗りました。蝦夷地に渡った大友は箱館近くの木古内、大野（現在の北斗市の一部）の開拓に成功。引き続き石狩地方の開拓を命令され、1866（慶応2）年、伏籠川の上流地域（現在の北13条東16丁目付近）で、御手作場（江戸幕府の直営農場）の造成を始めました。



大友亀太郎

【農業で活躍する人が現れる】

この時、大友と共にまず9戸35人が御手作場に移住してきました。ほとんどが東北・北陸出身者で、江戸時代の末期ころに箱館付近に移り住んでいた人たちです。

1870（明治3）年、大友は北海道を去りましたが、移住した人たちのなかから農業で活躍する人が現れます。そのうちの一人、高木長蔵は越後国（現在の新潟県）の出身です。1865（慶応元）年、土木技術を生かすために箱館に渡り、木古内を開拓していた大友と知り合いました。

高木は大友の求めに応じて御手作場に移り住み、開拓に協力。明治維新により時代が変わってからは本陣の用掛になり、名字帯刀を許されました。

1875（明治8）年に本陣が廃止されたため、札幌村に戻り農業に従事。洋式の農業方法を取り入れてリンゴ栽培を盛んに行い、札幌村での果樹栽培の草分けになりました。

【開拓使が協力を求める】

明治維新による時代の変化は、御手作場に移住した人たちをも巻き込みました。1869（明治2）年、新政府は開拓使を設置し、現在のJR函館本線から南の一带に札幌を建設する計画を立案。江戸幕府を倒した新政府にとって、御手作場以外の場所を選んで札幌建設を計画したことは当然のことでした。しかし、開拓使は開拓の人手を確保する必要に迫られていたので、御手作場に移住していた人たちに協力を求めました。

【開拓使の政策の下で】

1870（明治3）年、開拓使は現在の北7・8条、東5～7丁目の地域に牧場を開拓。物資の運搬用や乗用の馬を飼いました。御手作場にいた人たちはまずこの牧場で働きました。

また、開拓使は現在の北8・9条、東4・5丁目付近に生産局を設置。これは現在の農業試験場や畜産試験場のような施設です。輸入した作物の種子をまず東京で試してから、ここに移し換えて試験栽培したり、鶏、豚、馬の生産も試験したりしました。ここでも御手作場にいた人たちが働きました。

1882（明治15）年、開拓使が廃止されました。このころまでには、御手作場から開拓使の仕事に駆り出された人たちは札幌村へ戻りました。戻ってからは農業に従事し、札幌村発展の基礎を築いたのです。



ウィリアム・
ペン・ブルックス

【タマネギ栽培が始まる】

北海道にタマネギが入ってきたのは1871（明治4）年のこと。開拓使が米国から輸入した種子を札幌で試作したのが始まりです。開拓使に雇われた米国人技師ルイス・ペーマー、札幌農学校教授ウィリアム・ペン・ブルックスは、札幌村の農家にタマネギ栽培を指導。初めは、冬を越すための野菜として、自分の食べる分だけを作る小規模な栽培が続きました。明治時代の初めから、リンゴ、ブドウなどの果樹栽培が盛んでしたが、後に病害虫による被害を受けたので代わってタマネギ栽培が広がったのです。伏龍川流域の土壌がタマネギ生育に適していることも好条件でした。

【商品として栽培する】

1867（慶応3）年、大友の呼び掛けに応じて御手作場に移住した「中村磯吉」は、1880（明治13）年、自家用として消費されていたタマネギの大規模栽培に成功し、水路で東京へ運搬して販売を試みましたが、見慣れない野菜は受け入れられず廃棄して帰ってきたといわれています。

莫大な借金を抱えてまでも挑戦した中村の行動は農民たちに勇気を与え、「タマネギ栽培の祖」として語り継がれています。

その後、札幌村の農家「武井惣蔵」が商人に販売を委託することと商業的にも成功し、タマネギ栽培は明治以降に道内各地、全国へ広がっていきました。



幕末から明治にかけての
札幌とタマネギ栽培の歴史を知りたい方におすすめ。

22 札幌村郷土記念館

1977（昭和52）年に大友亀太郎の役宅跡地に開館した記念館。展示されている古文書やタマネギ栽培の用具などは極めて貴重で市の有形文化財として、また役宅跡は市の史跡として指定されています。

内部見学可。



札幌玉葱記念碑



北13条東16丁目2-6

